

校長 永井 元

高校の教員を自身の職業と意識してから42年が経とうとしている。この間、左手首の腕時計は、ほとんどの時間を私と行動を共にしている。1985（昭和60）年4月に教員となり、授業、特別活動、部活動、たくさんの場面での「はかり」でもある。この腕時計に、思考、判断、評価をする力があれば、私をどうみていることだろう。

これまで、必修、希望、長期、短期と実に多くの研修を受けてきた。教員になった当初の研修で聞いた、「授業の立方体」と「進路決定は生徒自身が自らの力で乗り越えるハードル」という言葉は今でも鮮明だ。この二つは、常に心に銘じ、当時の研修講師の思いも受け止め、仕事に励んできた。学校を運営する立場になり、職員にも折に触れて話してもいる。

研修を通して多くのことを学んできた。年を重ね、経験を積むだけではなく、種々の理論や教育を巡る動向等についても、それぞれの研修において学び、教員としての資質も変わった。多くの研修の機会を得られたことに、県教育委員会はもとより、当時の所属長、同僚に感謝したい。

昨年4月4日の職員会議で、期待する生徒像として5点、重点事項として8項目を示した。この一年、これらを常に意識して教育活動は展開されてきたが、年度末のこの時期、5点8項目について振り返り、4月を迎えようではないか。校内外の教育活動で、種々の研修の成果は無意識のうちに現れていたことだろうが、それぞれが受けたこれまでの研修の成果をも振り返り、教員としての資質の成長を見つめる機会をもってほしい。

教員の研修については、教育基本法第9条及び教育公務員特例法第21条、22条に明記されている。私たち教員の研修は、法に定められ、かつ、内容等の充実が求められている。法に記されているように、教員は絶えず研究と修養に励ま（教特法では「努め」）なければならないのである。

本校の職員の備えている資質は高いものと捉えている。授業はもとより、生徒や保護者、地域に向かう姿勢、教育活動への協働的な取組などにおいて、組織力の高さを感じる。互いの日々の関わりがそうさせているのであり、日常の仕事そのものが互いの切磋琢磨につながる研修となっているとも言えよう。職員室での何気ない語らいや職員会議での発言などから吸収していることは実に多い。昨年末の職員会議でベテラン教師が発した、「生徒と適度な距離感を保った」とか「ほどよい関係をもった」という言葉に含まれる意味や背景に思いを馳せ、日々の実践に活かしていかなければ、と強く思う。

まもなく、それぞれが新たな教育活動に携わることになる。この機会に改めて、学校教育の指針に記された教職員の研修内容等を読み返し、教職員として求められる素養や身に付けるべき力を理解するとともに、ライフステージをも考えた長期的かつ広汎な視野をもち、一層の研究と修養に励んでもらいたい。

研修の成果は、個人にとどまるものではない。研修で得た知見や指導方法等は、さまざまな方法により周囲へ伝えられるなど、組織全体に広げなければ研修の意味は薄れる。私自身、教員10年目ころまでは、自己の資質向上を目指すことに力を注いでいた。経験を積むにつれ、研修成果を校内外で発表し、還元することが増えた。自己の資質向上は、同僚をはじめとする同じ職に就く者の資質の向上、ひいては、未来をつくりあげる生徒のためにつながるということが分かってきた。研修を通しての私たちの成長が、未来をよりよく生きようとする生徒の人生の支えの一つになることを心に刻み、共に歩んでいきたい。

羽後の道 歩み 思いを 語り合う たがいの学び 精神(こころ)に刻む